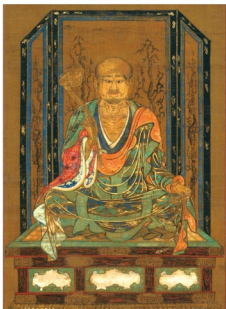


平成 25 年度 (2013 年度) 春季特別展

「大僧正行基展 なぜ菩薩とよばれたか」

会期 平成 25 年 4 月 20 日 (土) ～ 6 月 2 日 (日)



行基菩薩像 (堺市博物館蔵)

行基 (668～749年) は、奈良時代の僧で東大寺の大仏を建立し、大僧正の位を与えられました。しかし、意外とその生涯は知られていないのではないのでしょうか。

行基は民間布教を行い、行基を慕う人々の支援を得て、灌漑施設や交通設備の建造など社会福祉事業を行いました。いわば、現在のNPO活動に相当するといえます。仏教の布教だけでなく、民衆の生活の向上を図る事業を行ったことが、民衆の支持を集めたのでしょう。行基の生涯と事跡、また後世の行基にまつわる伝承を様々な資料から紹介します。

春季特別展「大僧正行基展 なぜ菩薩とよばれたか」

全期 平成25年4月20日(土)～6月2日(開)



行基誌断片（奈良国立博物館蔵）

行基は東大寺の大仏の建立に尽力したことで知られていますが、実は吹田にも関わりが深いことをご存じでしょうか。『行基年譜』の中の「天平十三年記」には行基の業績として「次田（吹田）堀川」「垂水（垂水）布施屋」があげられています。このように行基は灌漑施設、交通施設など社会・土木事業に尽力しました。行基がなぜ菩薩とよばれるようになったのか、彼の生涯をたどってみましょう。

行基は、天智7（668）年河内国大島郡蜂田郷家原（のち和泉国となる）で生まれました。父は渡来系氏族高志才知、母は蜂田古爾比売です。

持統5（691）年24才で受戒し、僧となります。その後山林修行し、慶雲元（704）年帰郷し、生家を寺（家原寺）とします。山崎橋の建造をはじめとして、池15ヶ所、溝6ヶ所、樋3ヶ所、堀川4ヶ所、橋6ヶ所、道1ヶ所、船息（港）2ヶ所、布施屋11ヶ所など農業関係施設、交通施設を建造しました。これらの施設は、農業振興や交通網の整備など、民衆の便宜を図るため造られました。行基を慕う人々が技術や資材・労力を提供して、これらの事業が行われました。大野寺土塔の文字瓦、山崎院の文字瓦から様々な身分の人が支援したことがわかっています。

こうした行基の活動に対して朝廷の対応が変化していったことが、『続日本紀』の記事から読み取ることができます。養老元（717）年4月23日条には僧尼は寺院で教えを受けるべきであるのに、小僧行基（傍点筆者、以下同）とその弟子はちまたに群れ集まって徒党を組み、怪しい活動を行い、百姓を惑わしている、と行基の活動を糾弾し禁圧したことが書かれています。しかし、天平3（731）年8月7日条には、行基法師に随う優婆塞（在俗の男性信者）・優婆夷（在俗の女性信者）ら、法令のとおり



行基と白山妙理権現の化身である老翁との出会い 池田市指定文化財「久安寺縁起」（仮名縁起 久安寺蔵）

修行する者は男は61才以上、女は55才以上であれば、出家することを許可しました。また、天平15(743)年10月19日条には聖武天皇が盧舎那仏を造立するために寺地を開き、行基法師が弟子等を率いて大仏造営に参加したことが記されています。小僧とさげすまれていた行基が法師と呼ばれるにいたり、天平勝宝元(749)年2月2日条の行基が没した記事には大僧正行基和尚と記され、人々から行基菩薩と呼ばれていたことも記されています。僧尼令では僧侶は寺院の中で活動するよう規定されており、税を免除されていました。行基の民衆を教化する活動は朝廷からみれば、勝手に得度する私度僧を増やしており、僧侶のあり方からはずれた、不穏な動きにみえたのでしょう。活動を制限された行基は、その後朝廷の方針にも配慮しながら、民衆を助ける事業を次々に行っていきます。そうした活動は朝廷にとっても無視できないものとなり、また遅々として進まない大仏造立を進めるため、行基とその支援する人々の力が必要となっていったのでしょう。

ところで、吹田周辺で造られた堀川や布施屋とはなんのでしょうか。堀川は水運をよくするための運河で、布施屋は旅人のための休憩・宿泊施設です。律令制度のもとでは、租などの税は自らの負担で都へ納めなければなりませんでしたが、地方から都をめざすのですが、途中で行き倒れる者が少なくなかったため、行基は布施屋を造ったのです。また、吹田堀川は淀川と神崎



『続日本記』天平勝宝元年2月2日条

(大阪府立中之島図書館蔵)

川をつなぐことによって都と西国の水上交通の便を図り、垂水布施屋は西国への道に面して旅人の救済を行ったと考えられます。残念ながらその遺構は確認されていませんが、垂水布施屋は垂水神社近辺に存在していたと考えられます。行基の四十九院のうち、摂津の寺院が建てられた年代からして、天平2～3(730～731)年、天平6(734)年、天平17(745)年に吹田堀川、垂水布施屋が建造された可能性があります。一方で、行基開創と伝えられている市内の佐井寺、常光円満寺は天平7(735)年開創という伝承があり、伝承ながらも吹田堀川、垂水布施屋が建てられた年代の可能性を示すものでしょう。

今回の展示では、行基の生涯と事跡を紹介し、なぜ人々から菩薩とよばれるようになったのか、またなぜ朝廷から大僧正の位を贈られることになったのか、様々な資料から紹介します。

(池田直子)



奔命寺を建立する行基「当山開基行基僧正絵伝」(奔命寺蔵 池田市立歴史民俗資料館写真提供)

土塔と行基

国史跡土塔は、堺市中区土塔町に現在も所在する、大野寺の旧寺院地内に所在する塔です。大野寺は、堺出身の僧・行基が建立した「四十九院」のひとつです。『行基年譜』によると、神亀4（727）年の建立開始と記されており、発掘調査においても、「神亀四年」銘の軒丸瓦が出土しました。

土塔は、文字どおり土を盛り上げて作られた十三重塔で、土盛りの際には、一辺30cm、厚さ10cm程度の粘土塊を各段の外端に並べ、型枠の役目を果たしています。

形状は、十二重までは段状で、各段の上面は本瓦葺き、つまり木造建物の屋根のように造られています。また、平面形は正方形ですが、十三重だけは円形です。上層の出土品からは、小規模な木造の建物の存在が想定できます。

さらに、これらの十三重の塔身は基壇に載っていることがわかり、この基壇の外装は瓦積みでした。この基壇の発見で、土塔の正確な規模が判明し、一辺が53.1mであることがわかりました。なお、高さは最上部が削平されているため、現状の8.6m以上であったことしかわかりません。土塔に葺かれた丸瓦・平瓦の中から文字がへら書きされているものが約1,200点みつけられました。文字の内容は大半が人名で、僧尼・姓（カバネ）をもつ氏族・姓をもたない氏



史跡土塔整備状況

族の名がみられます。これらは「知識」とよばれ、行基が土塔を建立した際に協力した人々と考えられます。実際に「知識」と書かれたものも出土しました。

土で造られた土塔は、「四十九院」の中でも大野寺だけに存在するもので、行基が生涯した故郷に建てられ、また「知識」の証として瓦にも記名を行ったりしていることから考えると、行基の「知識」の集団のシンボルとして建てられたと考えられます。また、国家仏教が盛んであった奈良時代に行基を中心とした民衆の力で建てた寺院であることに大きな意義を見出すことができます。そして、そこから出土する人名が記された瓦は、行基の「知識」の集団の構成や、活動を考えることのできる資料であり、ひいては奈良時代の仏教史を考える上で大変重要な資料といえます。（堺市文化財課 近藤康司）



史跡土塔瓦出土状況



史跡土塔出土文字瓦

行基の山崎橋と山崎院

1 はじめに

山崎は、現在の京都府大山崎町一帯に当たります。江戸時代以前は、桂川・宇治川・木津川が淀で合流し、淀川として山崎の東を流れていました。山崎周辺は、淀川と天王山によって形成された狭隘な地形であり、奈良時代には行基が山崎橋を架けました。

この橋は、山背国と河内国を結ぶ極めて重要な橋です。また、行基は、橋だけでなく兩岸に寺院を建立しています。山背側が山崎院、河内側が久修園院と呼ばれる寺院です。両者は、橋の管理や行き交う人々の給養など、いわゆる橋寺としての機能が想定されます。ここでは、山崎における行基の架橋と造寺についてふれてみます。

2 山崎橋と山崎院

山崎橋は、史料上では、道昭によって7世紀後半に架橋され、それ以降、8世紀の行基による再架橋、8世紀末の国家による修造を経て、10世紀後半に至るまで存続します。

奈良時代では、平城京から北上する山陽道が駅路として整備され、山崎周辺には、山陽道と山陰道が存在しました。山崎橋は、山陽道と山陰道の併用の渡河点として機能しており、極めて重要な橋でした。行基は、道昭による山崎橋の跡地をみて、起工を思い立ったといえます(『行基年譜』)。残念ながら、山崎橋の具体的な位置は特定されていません。

山崎院は、瓦の出土状況などから、場所が推定されています。この遺跡を山崎庵寺と呼んでいます。この山崎庵寺も山崎橋と同様の変遷を遂げることが発掘調査によって明らかになっています。

山崎庵寺では、山崎院に関わる8世紀の瓦は、平城宮式軒瓦や人名を記した平瓦・丸瓦などがあります。軒瓦の調達に際しては、政府の関与が想定できます。文字瓦には、造寺に参加した人々の存在が表されています。

7世紀後半の軒瓦は、道昭が住んだ飛鳥寺東南禅院の同瓦瓦を含んでいます。道昭が造営に関わったことを示す軒瓦です。山崎庵寺では、この7世紀後半と8世紀の瓦が共に出土しています。このことは、山崎庵寺が、道昭による造営を経て、行基の山崎院として整備されたことを端的に示しています。

周辺は可耕地に乏しく、母体となる大きな集落は想定できません。道昭や行基は、在地住民の絆を越えた人々を率いて架橋や造寺を行ったことが想定されます。

3 まとめ

行基による山崎での架橋と造寺は、考古学・文献史料によって、道昭の事績を受け継ぐ事業であったことがうかがえます。また、仏教による社会事業の実践を通じて、交通の利便性に依拠した人々を編成し、重要地点の交通の整備を行った姿といえます。これを国家の側からみれば、統治機構の整備を代行した行基の社会事業の性格が浮かび上がり、地域の側からみれば、地域を貫く外部との接点の場としての性格が改めて認識できます。

(大山崎町教育委員会 古閑正浩)



飛鳥寺東南禅院(左)と山崎庵寺(右)の軒丸瓦
(『大山崎町埋蔵文化財報告書』第25集 2005より)

予告 平成 25 年度(2013)年度第 1 回企画展「吹田村庄屋 気比家の絵画」
ロビー展示「浜屋敷10年の歩み」同時開催 会期：平成25年6月15日(土)～7月7日(日)

本年最初の企画展を開催いたします。今回の展示は、館蔵美術資料の中でも気比家旧蔵資料に焦点をあてた展示です。

気比家は、江戸後期に旧吹田村で庄屋を務めていた家柄ですが、同家に伝わった絵画資料は、平成 8 年に当館へ寄贈されました。本展では、金子雪操はじめ、墨江武禪、岡熊嶽など、大坂画壇で活躍した絵師の作品を主に展示いたします。今回は、展示の中心となる吹田ゆかりの画家・金子雪操をご紹介します。

金子雪操 その人となり

雪操は、寛政 6 (1794) 年に江戸で生まれ、伊勢長島藩(現・三重県)藩主・増山正賢(号・雪斎)に仕えて花鳥画を、のち越後へ赴き銅雲泉から山水図を学びました。それから、大坂へ移り、井内左門という代官の招きによって、吹田へも滞在していました。その後、再度大坂へ戻り、安政 4 (1857) 年に没しています(岡本撫山『浪華人物誌巻二』、土屋弘『晚晴樓文鈔二編 附載意燈録上』による)。伝記史料は多くなく、交友関係等も判然としませんが、清貧を旨とし、頑固で他人になかなか心を開かず、画事に没頭し我が道をゆく、という少々風変わりな性格を示す逸話が数多く伝わっています。



⑧金子雪操「閑羽図」(無館蔵、気比家旧蔵)

⑨「金子雪操筆塚」(大阪市・清寿院)

雪操の筆塚が、大阪市天王寺区の黄葉宗寺院・清寿院にあります。開帝廟として知られた同寺へは、江戸中期以来、木村兼成堂はじめ多くの文人が訪れました。雪操は「閑羽図」も描いており、同寺とのゆかりが窺えます。尚、本図は田結莊千屋(雪操の弟子)が、清寿院で行った雪操遠忌法要の際に授けた「閑羽図」と同図の可能性がありま。



雪操の画風

現在確認されている雪操作品で最も多い画題は、山水図です。雪操の山水図には水墨、青緑(群青や緑青で彩色した)山水。右図など)両方の作品がありますが、「日々古法帖を摸し画譜を臨し」といたと語られるように『浪華人物誌巻二』、現存作品を見る限り、古画の山水画法をしっかりと習得し、中国人画家の様々な山水図を相当程度学習していた形跡があります。

また、花鳥画は増山雪斎に学んだとされますが、雪斎は南嶺派(江戸中・後期に流行した中国人画家・沈南嶺系統の、写実的な花鳥画を得意とした画派)に習熟しており、雪操にも精緻な花鳥画が見られます。さらに、「閑羽図」(左下図)のような迫力のある大幅の人物像や「立雛図」のような年中行事に関わる絵画なども手掛けており、雪操が多様な画題を、習熟した様々な技法を用いて描いていたことが窺い知れます。

雪操は、今でこそあまり知られていませんが、幕末の画家番付などを見ると、南画家としてかなり上位に位置づけられ、高い評価を受けていたことが分かります。吹田市内には気比家のほかにも、雪操画が多数存在しています。今回の展覧会が、高い画技、高評価を得ていながら歴史に埋もれてしまった金子雪操を知る機会となり、また、再評価のきっかけになればと思います。

(寺澤慎吾)



金子雪操「雪平山水図」(無館蔵、気比家旧蔵)

今年度、市文化財保護条例に基づく補助金を活用して都呂須地車の保存修理が行われました。ここでは、その修理過程で墨書銘が見つかった地車の太鼓について紹介します。

都呂須地車について

吹田市内には江戸後期～明治初年建造の8台の地車が残っています。かつて高浜神社や泉殿宮の神事で曳行されたといい、内7台（いずれも市指定有形民俗文化財）が現在も吹田まつりなどで曳行されています。都呂須地車はその中で最古の建造で、天保6（1835）年製作の北河内型の地車です。地車に残された墨書によって、製作者は河内国讃良郡河内屋北新田の大工彦兵衛・幸助・作藏・左兵衛であること、彫物については摂津国浪花住の花岡良造義信の作であることが知られます。

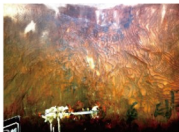


都呂須地車

太鼓内部から墨書見つかる

この度の修理では、長年の使用により磨耗した太鼓皮の張替も行われました。その張替作業時に、文化財保護課職員が太鼓胴の調査を行ったところ、内面から墨書が見つかりました。

墨は全体的に薄れてしまっていますが、延享2（1745）年と明和4（1767）年の墨書銘を確認でき、太鼓の製作時期が延享2年かそれ以前に遡ることが明らかになりました。現存する都呂須地車は嘉永5（1852）年に河内より購入さ



中央に延享2年の墨書銘（上下逆）
右下に見えるのは明和4年の墨書銘の一部

れたと伝えられており、この太鼓は先代の地車より引き継いだか、他の用途から転用されたものであると考えられます。

なお、吹田の地車に関して、現存するものはすべて天保期以降の建造ですが、元禄3（1690）年の大火で焼失した高浜神社の社殿を同6年に再建した際に行われた正遷宮祭において、各地下が地車を作ったり修理をしたりして競曳したとの言い伝えが残り〔※〕、元禄期にはすでに地車が曳行されていたといわれています。

ところで、太鼓胴内面には上記の墨書銘の他に、2つの墨書と昭和期の修理の記録と思われるプレートが残ります。また、胴外面には「乙寛政九巳七月日 都呂須 子口中」と刻字されています。長い年月を経て今に伝わるこの太鼓には、様々な文字記録が残されています。（中間宏美）



外面の刻字

〔※〕吉田植造「だんじり今昔」、『吹田市文化財ニュース』No.6、1983。



2012年11月15日、当館応接室ギャラリーがオープンし、西村公朝氏の彫刻、村居正之氏の日本画が公開されました。それを記念し、西村公泉氏（公朝氏の長男）と村居正之氏にお話しを伺いました。

西村公朝（にしむら・こうちょう）

1915年、富田村（現・高槻市）生まれ。40年、東京美術学校卒業。41年、美術院に入り、仏像修復を始める。戦後、吹田にアトリエを構える。67年、東京藝術大学助教授（のち、教授。～83年）。92年、吹田市立博物館初代館長に就任。2003年12月2日、逝去。享年88歳。



にしむら・こうせん

1960年、吹田市生まれ。78年、東京藝術大学大学院彫刻専攻修了。81年、国展初出品、安田火災財団美術奨励賞。89年、宝塚造形芸術大学（現・宝塚大学）講師（のち教授。～2013年3月）。国画会、日本美術家連盟会員。個展・グループ展を多数開催。



公朝と吹田のかかわり

最初に、西村公朝さんと吹田市の関わりからお話しを伺いたいと思います。

——公朝は、高槻市富田の生まれなんですけど、私の祖父の時代から吹田市に住むようになりました。そこに公朝がアトリエを構えて、今もアトリエは残っています。吹田で作家活動をしていっていたわけでしょうね。最初は中学の教員になったらしいんですが、すぐ美術院の方へ行くようになりました。仏像の勉強をすれば作家の役に立つのではないかとということでしょう。

僕らが子どもの時は、ほとんど父とは会ってないくらい、家には帰ってないですね。仏像修理がほとんどで。その時代は、その場所へ行って修理していましたから。

祈りの造形とは

公泉さんも仏像修復の道を志したそうですが、公朝さんはどういった反応だったのですか？

——僕は想像力が無いと思っていたんですよ。手は器用だったので、仏像を黙々と彫るような、職人的な姿に憧れて、その道に行きたいと言ったんです。けど、それは駄目だった。その前にちゃんと彫刻の勉強をしろって言われて。結局ずっと嫌々彫刻をやってきたんですけど、もう

彫刻しかできないなど。自分はこの道なんだってのがようやくわかってきたという感じで。きっと、父がなれなかった現代彫刻家としての僕に託したんじゃないかと。父の唯一できなかったことをやるのはそこかなと思っているところですね。

「祈りの造形」というようなことを継承されていますね。——仏像という、好きな方はいっぱいいるんですけど、どうしても形にとらわれるんです。仏像の本とか仏像の彫り方とかそういうものを見て、その寸法通りに切るとかね。形の方から入って、折りからは入ってないんですね。本来は、どんな石ころにでも何にでも仏様がいて、それを拝むことが本当の姿、折りの姿だと思うんですけどね。そこに、父の「祈りの造形」という言葉ですね。たぶんそういうことを言ったのは父が最初じゃないかなと思うんですよ。

仏師は仏像を彫っているけども、仏師が拝んだところで仏像になるわけじゃない。例えば、完成されて、開眼法要もされて仏像になるって言うけど、本当の仏像には、信者さん達が拝んで拝んでなっていくもの。だから道ばたにあるようなお地藏さんでも、おばあさんとかが拝んでいくうちにそれが仏像になる。ただ仏師が彫ったからといって仏像になるわけじゃないと思います。誰でもが拝んでいけば仏像になるんじゃないかと。そのあたりが「祈りの造形」だと思うんですよ。だからテクニックではないっていうことですよ。



「夫婦福神」（左）、「菩薩像」（中）、「不動明王」（右）

彫刻家・公朝の作品に想う

父親の作品を、公泉さんはどう見ますか。ここにある初期の作品（中央の菩薩像を指して）などは。——この菩薩像は、若い頃に作っていますので、テクニックだと思います。「祈りの造形」というのを指す前の、自分の持っている技術でそれが表現

できないかというのが、花を持たせるなど、いかにも仏様のような姿にしたものだと思います。

不動明王、夫婦福神像は、彩色を施した像ですね。ぱっと見は円空のようですが、ちょっと違う。どういふところが違うのでしょうか。

——なんていうかな。円空は、最初は^{おん}陀でぽんぽんと割っている。みんな陀だけで彫ってると思って陀彫り陀彫りって言うてるけど、本当は彫刻の手順で言うとか陀彫りっていうのは粗彫りのことを言うんですよ。たとえ平ノミでやっても、粗彫りは陀彫りなんですよ。陀をもちろん使いますが、それは本当にパンパンと割るだけで、だから円空は全国を行脚していく中で、お世話になったからということでそこに仏さんを彫っていくのに、そこにあったのは焚く前の薪だった木だと思うんですよ。そんなものを割ったときに、それを利用して、もう数分でできたんじゃないかなと。円空もきつと最初からあの、パンパンとした、ああいうスカッとしたものだったのでは無いと思います。あれは最終的なもので、最初は細かく彫っている作品が多いですよ。だから、円空はきちとした仏像も彫れた人だ、と父も言っていました。

作品に彩色を施すのはいかがなものかと、父と子の論争があったように聞いておりますが、

——このお不動さんは特にそうですけど、着色で、こってり塗りまくってるのは、彫りが全部ピッチとできていないところを最後に色を付けたら出来上がったように見えるんじゃないか。これって色でごまかしてるんじゃないのって言ったら、「えっ」って感じでした。最近の彫刻は、木彫はとくにそうですけども、着色している作品がすごく多いんですよ。みんな彫りができないところを、色でごまかしている。でもお経の中に、色っていうのは、形。形あるものには色があるとある。だから最後、色でも表現しろということなのかと、色々考えて僕も、今、着色をしてみようとして努力している。でも、やっぱり色は、自分の彫りができていないのをごまかしているなと思うんですよ。色を付けてみたらまだここが、もうちょっと彫ったほうがいいのかと思ってしまう。いったん着色した後にまたそれを削ると、合わなくなってくるので、やっぱり形を最後まできちと追求したところで、最終的に

色を塗らなきゃいけないと。

十大弟子を作った時には？

——十大弟子の時には着色をしなかったの、「あっ」て。僕の言うことを聞いたのかなって感じで終わったんですけど。やっぱり粗いタッチのままで終わっていても、彫りが決まっているっていうか。もうこれ以上彫る必要がないっていうところで止めてるしね。自分でもきつと、これは色を塗る必要がないっていう事を言っ



「十大弟子 迦旃闍」
(愛宕金仏寺蔵)
公朝作、釈迦十大弟子のうち最後の作品。公泉氏と共同作業で完成させた。

たんだと思うんです。公朝作の十大弟子は、インド的な顔の表現にしています。一体一体が、この人はどういう神通力があって、つていうことをきちと分かっていても、もう一度下調べをやった、それを想像しながら形を考えていたんだと思う。だから単純な、ただ全部が合掌しているだけだろうけど、その人の個性みたいなのをすべて把握して、その人になりきっているのかな、そういう姿にしようとしている感じがしますよね。

春季特別展「行基展」関連ワークショップ

公衆さんには、枝からほとけさまを彫り出すワークショップ「やさしいほとけのつくりかた—心のほとけをほりだす」をお願いしました。

——それに使う枝をいっぱい持ってきます。この中にはもうきつと仏さんがいますから、「何を彫ろう」とか「仏像を造りたいんだ」とか、そんな気持ちは一切必要ありません。枝の中に仏さんが入っていることを僕が確認しましたから。仏さんが語りかけてきて、自分たちを出してくれて言っているのを、ただ素直に聞いたら出てきます。ちょっとノミを入れて、ちょいちょいと墨でも入れたらそれで仏さんになります。そういうワークショップをやりたいと思っています。



むらい・まさゆき

1947年、京都生まれ。68年、青塔社入社。71年、日展初入選。75年、日展特選受賞。以降、日展出品、個展開催を重ねる。2004年、アテネ・オリンピック記念切手原画制作。08年、大阪芸術大学教授（～現在）。吹田市在住。

故郷の風景を描く

まずは「石舞台 春風」について、描かれた時の思い出などを伺いたいと思います。

—僕は若いときから、とりわけ風景を好んで描いておりました。京都生まれという事からか、どちらかというと自然というよりも、京都の町屋の中とか、市民生活の中で育ててきました。僕の中で自然とは何かと考えたときに、木とか川とかのある風景ではなくて、むしろ、構造物のある中の方が、自分の居心地が良かった思いがすごくありました。30代の頃は、ブラインド越しの都会風景などを描いておりました。30代後半くらいに、自分の故郷を描こうと思いました。すると、絵になるものが、神社であったり、少し人間が手を加えたものであったりと、自然と構造物とのマッチでした。京都・奈良の土地柄は、自分の生活空間の中にある、石舞台も古代



「石舞台 春風」1995年

の人間がつくったものである、一回行ってみたいと思って。どんと座っている感じがよかったので、描いてみたいと思いました。

師・池田通郷の教え

日本画は池田通郷（大正～昭和に活躍した日本画家）に師事したんですね。

—高塚村は日吉ヶ丘、むかしの美工（注：現京都市立御所美術工芸高校）で日本画をやっておりました。その後、一度大学受験を失敗したので、作家になりたいなあと思っていたときに、同級生の誘いがあって青塔社（注：池田通郷主催の画廊）に入りました。

通郷は、その教えとしてよく言われたことは、絵は作品を大事にしなさい、ということです。作品とは、おのれの生き方。全て自分が出るものだから、まっすぐいきなさい、とよく仰っていました。ただ、

絵の指導となると、何を習ったのかな、と思うぐらい何も教えてはいてない。技術的なことは先輩たちが教えてくれましたが、通郷先生が教えてくれたのは、大きな意味での絵描きとしての生き方でした。

すごく筆まめな先生でしたので、よく手紙を頂くんですね。いろいろなアドバイスを、口で言うよりも、むしろ、手で書かれて。それが、30代半ばに近い頃になって、突然来なくなりました。先輩に、「最近手紙が来ないし、何か先生に対してご迷惑な不祥事を起こしたんじゃないか」と聞いたら、「お前もやつと一人前になったのかな」と、ボツツと言われたんです。こいつはなんとか一人で、よちよちでも歩けるようになったのかな、ということなのでしょう。

逆に言えば、通郷先生は自分の画風をどうこうするのは、絶対に嫌でした。むしろ、処女峰を登れ、と。人が歩いた道は歩くな、という教えをされ、それは栖鳳先生（日本画家・竹内栖鳳。池田通郷の師。）の考えでもあったようです。いまになって考えると、考えれば考えるほど怖い話、これは、大変。人の画風と似たようなものは描くなということですから。

ギリシャの風景との出会い

先ほどの石舞台の絵から20年近く経ってからの「閑」という作品です。これについてはいかがでしょう？

—取材地はギリシャ・ロードス島の十字軍騎士団の屋敷です。寄生したと思うのですが、窓のところに花が咲いていたのが、とてもきれいだったので、光と影と美しい花を描いてみたい



閑 2014年 すから。

2010年4月～2011年11月まで、京都府立美術館に飾られていた作品。

先生のギリシャの絵には、ブルー（群青）のイメージが

強いですが、ブルーにこだわるのはどうしてですか？
——日本画をされる人にとって群青の藍銅鉱（らんどうこう）という石は、たいへん基本で中心となる絵の具の一つなんです。高価な絵の具なので、若い時はなかなか使えなかったのですが、石の持つ魅力というんですか、群青だけでなく、天然石はいいものが多いです。石に、深みと先ほどの画品じゃないですけど、品格があるような気がします。それは描いていく上では、たいへん助かる。画家にとっては自分に無くて、絵の具がそれを表してくれるというラッキーな面も持っています。それを使うことが、長い日本の歴史のなかで、次の世代に送っていくために大事だろうと思います。

技法としては、最初に白い紙の上に赤い色を一度塗ります。それから黒い絵の具を塗ります。そこに粒子の粗い絵の具を2度ほど塗りまして、群青の絵の具を7、8回重ねていきます。それから、形を下図から写すと、私の場合、そのまま全部できあがっています。あとは中を描いて、もう少し細かいときは、一、二度塗って合わせていくという具合です。

先生の絵を見ると、すごく立体的に見えますが、これは光と影を描いているからでしょうか？

——スケッチを目的に2度目にギリシャへ行った時、いざ、スケッチブックを出して描いてみると、描けないんですよ。白い紙に黒の鉛筆で教会を描いても、デッサンが全然とれない。描いても描いても壁の絵のように見える。自分のデッサン力がこんなに無いのか、と愕然としました。どうしようかと思った時に、ギリシャは光と影が強いので、洋画の先生がやっているように光と影で表現してみようと考えました。色画用紙に白いコンテと色鉛筆の白で、光から描きましたら、なんとなく形が取れだしてきて、それをずーっと進めていって、最終的には、形を取れるようになりました。ギリシャの風景を描くときには、“線”で描いて向こうから完全に拒否された、という思いがあるので、光と影という“面”で、立体をとろうとしている部分があります。

画題としては神殿などの石造建築にすごくこだわりがおりのような気がします。いかがですか。

——はいそうです。最初は白い教会とか青いギリシャのエーゲ海とかに興味がありました。けれど、2年に1回、旅行に来て、スケッチして帰るといって、僕の絵は観光絵はがきのように

なっているんじゃないかと思ひまして、もう少しギリシャの中に入ってみたいという気持ちがありました。

個展の時に、一点遺跡を描いたことがあって、自分では良い作品に仕上がったと思いました。古代ギリシャは紀元前ですので、キリスト教文化ではない。そのことが、神々の信仰の中にあるわれわれ日本人に、違和感無くすんなり入ってくる。最初にヨーロッパへ行ったときに、宗教画をいっぱい見て、もう血の描かれる作品は見たくない、と途中で嫌気がさしました。その時に、ギリシャはそういう臭いがしないということがあって、今考えてみると、それで、ギリシャの世界に入って行きやすかったんじゃないかと思います。ですから、いまは基本的には紀元前のものの方に興味があります。

吹田にアトリエを構えて

吹田市との関わりについて伺います。吹田へいらしたのはいつごろですか？

——35歳の時にこちらへ来たんです。ちょうど、その一年前に結婚しまして、京都で暮らしていましたが、仕事場が狭くなったので、広いところを探していました。京都の人間としては大阪へ行くのは抵抗感がありましたが、アトリエが確保できるのなら、と思い切って移りました。それで、吹田へ来て住んでみたら、半年も経たないうちに、こんな良いところは無い、と思いました。交通の便はいいですし、環境的にも悪くありません。

1時間のハンディキャップを背負ったら、京都の画商さんたちが、電話で「先生、今度一枚絵を頼みます」と、依頼してくるんですね。いままでは必ず家へ来て注文してくれていたのが、電話一本で済む。吹田の家へ来て、ちょっと喋って帰ったら、半日を無駄にします。これは、採算的に合わない画家なんだろうな、と思いました。そうすると、大事にしてもらっているのかどうか、よく見えてきたんですね。自分が本当に必要とされているかっていうのは、ハンディを背負って初めて見えた。だから、こっちへ来て、周囲に絵描き仲間はいませんけども、ある意味ではいろんな事を勉強させていただいている。違う仲間も多くなりました。これは、僕は吹田に住まわせていただいて、財産を得たような気がしております。

平成 25 年度春季特別展「大僧正行基展 なぜ菩薩とよばれたか」関連イベント

□オープニングイベント

- 場所／2階講座室とロビー 参加無料
- 4月20日(土) 午後1時
開会式・展示案内
- 4月20日(土) 午後1時45分～2時45分
舞臺「天平の舞と調べ」
実演／天理大学音楽部
解説／天理大学教授 佐藤浩司氏
定員／120名(先着順)
- 4月20日(土) 午後3時～4時
講演会「宗教事業家としての行基」
講師／当館館長 中教弘光
- 4月20日(土) 午後4時10分～
「古代の器」食体験
先着／100食 なくなり次第終了
協力／吹田高校、浪屋敷 飯澤清治氏

□講演会

- 場所／2階講座室 参加無料
- 5月12日(日) 午後2時～3時30分
「行基の山崎橋と山崎院」
講師／山崎町教育委員会 吉岡正浩氏
- 5月18日(土) 午後2時～3時30分
「行基の仏教と国家観」
講師／奈良国立図書館館長 千田裕氏
- 5月26日(日) 午後2時～3時30分
「土塔の建立からみた行基の活動」
講師／堺市文化財課 近藤康司氏

□歴史講座

- 場所／2階講座室 参加無料
- 5月4日(土・祝) 午後2時～3時30分
「行基をめぐる美術」 当館学芸員 寺澤慎吾
- 5月19日(日) 午後2時～3時30分
「行基と吹田」 当館学芸員 池田直子

□ギャラリートーク

- 場所／特別展示室 観覧料が必要です
- 5月4日(土・祝) 午後3時30分～4時
解説／当館学芸員 寺澤慎吾
- 5月18日(土) 午後3時40分～4時10分
解説／当館学芸員 池田直子
- 6月1日(土) 午後3時45分～4時15分
解説／当館館長 中教弘光
- 6月2日(日) 午前11時～11時30分
解説／当館館長 中教弘光

□ワークショップ(6月1日以外は要申込)

- 開催場所／2階講座室 費用／無料
- 4月27日(土)・28日(日) 午後1時～3時
「大仏さまのお面をつくる」
講師／版画家 田主誠氏
定員／各日20組(多数抽選)
締切／4月17日(水)(必着)
- 4月29日(月・祝)・5月3日(金・祝)
午前10時～12時、午後1時30分～3時30分
「びかびかカラフルなだんごをつくる」
講師／法政大学・関西大学の学生
定員／午前・午後各20組(多数抽選)
締切／4月19日(金)(必着)
- 5月5日(日・祝)・6日(月・休)
午前10時～午後4時
「やさしさと力のつくりかた一心のほけとけをほりだす」
講師／金剛弘子 西村公泉氏
定員／各日20名(多数抽選)
締切／4月25日(木)(必着)
- 6月1日(土) 14:00～15:30
「天平の舞と調べにふれてみよう」
実演／天理大学音楽部
指導／天理大学教授 佐藤浩司氏

□バス見学ツアー(要申込)

- 5月25日(土) 午前9時30分～午後4時30分
家原寺、史跡土塔など、和泉地域の史跡をたずねます。
集合・解散場所／吹田市役所正面玄関前
費用／拝観料・入館料が必要 定員／38名(多数抽選)
締切／5月15日(水)(必着)
- 6月2日(日) 午前9時30分～午後4時30分
東大寺・唐招提寺など、奈良のお寺をたずねます。
集合・解散場所／吹田市役所正面玄関前
費用／拝観料・入館料が必要 定員／38名(多数抽選)
締切／5月22日(水)(必着)

□おでかけイベント(要申込)

- 5月16日(木) 午後1時～4時
行基ゆかりの山崎院跡等と山崎町歴史資料館をたずねます。
集合・解散場所／JR山崎駅
費用／拝観料・入館料が必要 定員／30名(多数抽選)
締切／5月6日(月・休)(必着)
- 5月23日(木) 午後1時～4時
行基ゆかりの寿命寺、教王院と池田市立歴史民俗資料館をたずねます。
集合・解散場所／阪急池田駅
費用／拝観料が必要 定員／30名(多数抽選)
締切／5月13日(月)(必着)
- 5月9日(木) 午後2時～4時
「光華鋳造工原見学」
開催場所／光華鋳造工場
解説／織物美術家・龍村光華氏
集合時間・場所／午後1時15分 京都市営地下鉄北大路駅南改札口
定員／20名(多数抽選)
費用／入館料500円・バス代が必要
締切／4月29日(月)(必着)
- 5月30日(木) 午後2時～4時
「光華鋳造工原サロニー」金箔・模様の魅力
開催場所／光華鋳造工場
解説／織物美術家・龍村光華氏
集合時間・場所／午後1時15分 京都市営地下鉄北大路駅南改札口
定員／20名(多数抽選)
費用／入館・参加料1500円(お茶・お菓子付)・バス代が必要
締切／4月29日(月)(必着)

□吹田まち案内人と歩く・ずいした史跡探訪(要申込) 各定員30名(多数抽選)

- 4月21日(日) 午後1時～4時
常光円満寺・観音寺など旧吹田地域の史跡をたずねます。
集合場所／JR吹田駅中央改札口
解散場所／泉蔵宮(阪急吹田駅) 締切／4月11日(木)(必着)
- 4月26日(金) 午後1時～4時
佐井寺など佐井寺地域の史跡をたずねます。
集合場所／阪急千里山駅西改札口 解散場所／阪急南千里駅
締切／4月16日(火)(必着)
- 5月2日(木) 午後1時～4時
墨木神社など墨木地域の史跡をたずねます。
集合場所／阪急豊津駅 解散場所／北大阪急行江坂駅
締切／4月22日(月)(必着)

□特別公開 いずれも午後1時～4時。

- 4月21日(日) 観音寺(南高浜町7)の龍玉観音(観音堂内部には入れません)
- 4月26日(金) 佐井寺(佐井寺1丁目)の護摩堂(御堂口は入れません)

■イベントの申込方法／はがきまたはファックスにイベント名、日時、参加者全員の氏名、住所、電話番号を書いて博物館へ。小雨決行。

吹田市立博物館だより第53号 平成25(2013)年3月31日発行
発行 吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号 TEL.06(6338)5500
FAX.06(6338)9886 eメール http://www.suita.ed.jp/hak/index.html